１　部局名

理学部

２　学長指定課題

主体的学修の促進と俯瞰的視野を持つ人材の育成

３　事業名

主体的学修の促進と俯瞰的視野を持つ人材の育成

４　事業実施代表者名

理学部長　村上　哲明

５　事業の概要

本事業では、自ら考え、自ら学ぶ姿勢を身につけるために、同じ分野の先輩学生が後輩をサポートする仕組みや、専門分野の異なる学生が相互に教え合う機会を提供する。現在実施している「理工なんでも相談室」を発展的に継続させ、異なる専門分野の学生の相互交流も検討する。また TA を補完する形で GP アシスタントを配置する。このような相互啓発により、主体性の促進と共に、狭い専門分野にとらわれない俯瞰的視野を持つ人材の育成を目指す。

(1) 自学自習をサポートする仕組みの検討

理工学系では数電機 GP において理工数学相談室等を、また学長指定課題により「理工なんでも相談室」を開催してきている。このうち、現在実施している「理工なんでも相談室」を発展的に継続させ、同じ専門分野の相談だけでなく、異なる専門分野の学生の相互交流も図るような仕組みを検討する。具体的には、担当する GP アシスタント学生を中心に検討を進め、自主的な提案を尊重しながら教員がサポートする形での実施を目指す。

(2) 主体的学修促進のための新たな授業デザインの検討

各コースの提供授業において、TA を追加配分し新たな要素（学生が主体的に考える）を取り入れることにより、知識伝達の受動型授業から、自ら積極的に参加する能動型授業への転換を図ってきている。この際の授業時間内外のサポートは今後も必要であり、全学予算による TA を補完する形で GP アシスタントを配置する。

６　取組成果

本事業は，近年顕著となっている学修において受動的な学生に能動的・主体的な学習態度を身につけさせることを目的として始められた．教員サイドは各々工夫をしているが，教員側と学生側の「学修」に関するイメージの乖離の広がりが見られたことがその背景にある．事業の目的に述べられていることを目指して始められた．具体的な取り組みは，

(i) 理工なんでも相談室の立ち上げ，

(ii)「理工なんでも相談室 」と連携を目指した，各専攻の授業への TA の配置である．

(i)については，2017 年度は理工ゾーンで週一回開催された．ただし，理工ゾーンは 1-2 年生の多くが学ぶゾーンとは離れていたため，その認知度に問題があった．そこで，2018 年度以降は，開催場所を 1 号館に移し，　三専攻毎に分け，週２回の開催とした．2017 年度のデータがないため，2018 年度に増加があったかどうかは判断できない．2019 年度も同様な形で開催した．相談件数に関する分析についてはすでに述べたとおりである．　相談の内容では，コースのカリキュラム，教職コース，研究室の選ぶ際の注意点など，学修や将来の研究分野に関する長期的視点の相談もあったものの，多くが，問題の解き方や試験対策であったように思われる．こうした質問に丁寧に対応することは，却って学生に「依存」の気持ちを醸成せしめ，主体的に自分で考える姿勢を身につけるのに有効なのかどうかは疑問であり，今後の課題としたい．なお,「理工なんでも相談室」については，理学工学の横断的な取り組みであり，相談に訪れた学生も，都市環境学部，システムデザイン学部を含む広いものとなっている．これらの状況を鑑み，本取り組みの終了後も何らかの形で継続させることが課題である．

(ii)については，各専攻が，その特性に応じて本取り組みの予算のもと，TA を配置した．各コースともに学生の学修支援という視点からは大きな成果があったと思われる．しかしながら,「理工なんでも相談室」との連携や，学生の能動的・主体的な学修態度の育成についてどれほど効果があったか？様々な質問に手厚くサポートすることは大切であるが，自立を促す結果に結びついているかは疑問である．

何でも相談室や授業支援において,「学部生の質問に丁寧に答える」ことは重要である．高校までの教育産業のサービスに「顧客」としての経験がない学生がそうした「サービス」を求めることに対し，あえて距離を置くことで，自立を促すという技量を持ち，さらに教員と学生とのギャップについて問題意識を共有することが可能な従来にない TA の育成も本取り組みの後続課題では重要になると思われる．